

WITH MATERIALS

MITSUBISHI MATERIALS communication magazine

SPRING
2023
vol. 05

特 集

循環に 価値を。



循環に価値を。

2023年度から2030年度までを対象とした、三菱マテリアルの「中期経営戦略2030（以下、中経2030）」が、4月からスタートしました。その中で、注力していくテーマは「循環」です。なぜ今「循環」にこだわるのか。そして2030年の社会において、三菱マテリアルはどうありたいのか。執行役社長の小野が語ります。

CEO INTERVIEW

なぜ今「循環」なのか。

三菱マテリアルは「人と社会と地球のために」という企業理念のもと、社会に不可欠な素材を供給しています。この度、中経2030を策定するにあたり、2030年に向けた私たちの目指す姿を「人と社会と地球のために、循環をデザインし、持続可能な社会を実現する」としました。そして、その実現のために私たちが歩むべき道筋を戦略としてまとめたものが、中経2030です。

前中経では、事業ポートフォリオの最適化に取り組みました。これまで幅広い事業を展開してきた当社が、この先も社会にさらなる価値を提供していくためには、私たちの強みを明らかにし、経営資源の配分を整理する必要があると考えたのです。その中で、当社が注力すべきビジネス領域として導き出したのが、「資源循環の拡大」と「高機能素材・製品供給の強化」。

そして、それらに取り組むにあたり、キーワードとなるのが「循環」です。資源には限りがあり、それらを人と社会と地球のために無駄なく使うにはどうしたらよいか。近年は循環型経済に注目が集まっています。そこでは、再生・再利用しやすい製品の設計、製品の長寿命化、ものを共有するなどに加え、今まで活用されていなかった廃棄物を新たな資源と捉え、循環させていくことが、持続可能な社会をつくる上で欠かせません。こうした考えを「循環をデザインする」という新たに制定したビジョンに込めて、これからの事業に取り組むことにしました。

では、「循環をデザインする」とは、何をするのか。当社の役割は、長年のものづくりの技術とノウハウの蓄積により培われた高度な非鉄金属のリサイクル技術を活かし、金属資源を循環させるためのプラットフォームを構築すること。そして、そのプラットフォームに自らもプレイヤーとして加わり、価値を創出していくことです。

「なぜプラットフォーマーだけでなく、プレイヤーでもあるのか」「なぜものづくりの会社が、製品をつくる動脈型事業だけでなく、廃棄物から資源を取り出す静脈型事業にも注力するのか」——そう疑問に思われるかもしれませんが、しかし、静脈と動脈、その両方に取り組まないと知り得ない、社会のニーズがある。そして、それをものづくりの現場に活かし、付加価値の高い製品をマーケットに提供することが、バリューチェーン全体を成長させていくと考えています。

「循環をデザインする」というビジョンを体現する戦略と取り組みを、今号の特集、また次号以降でも継続して伝えてまいります。どうぞご期待ください。

「中期経営戦略2030」は、Webサイトよりご覧いただけます。



「循環」の力が必要です。限りある資源を無駄なく使うために、

執行役社長

小野 直樹

「循環を
デザインする」
ということは、

未来をデザインすること。

私たちの目指す姿

人と社会と地球のために、循環をデザインし、持続可能な社会を実現する

「豊かな社会 | 循環型社会 | 脱炭素社会」



動脈型事業・
静脈型事業とは？

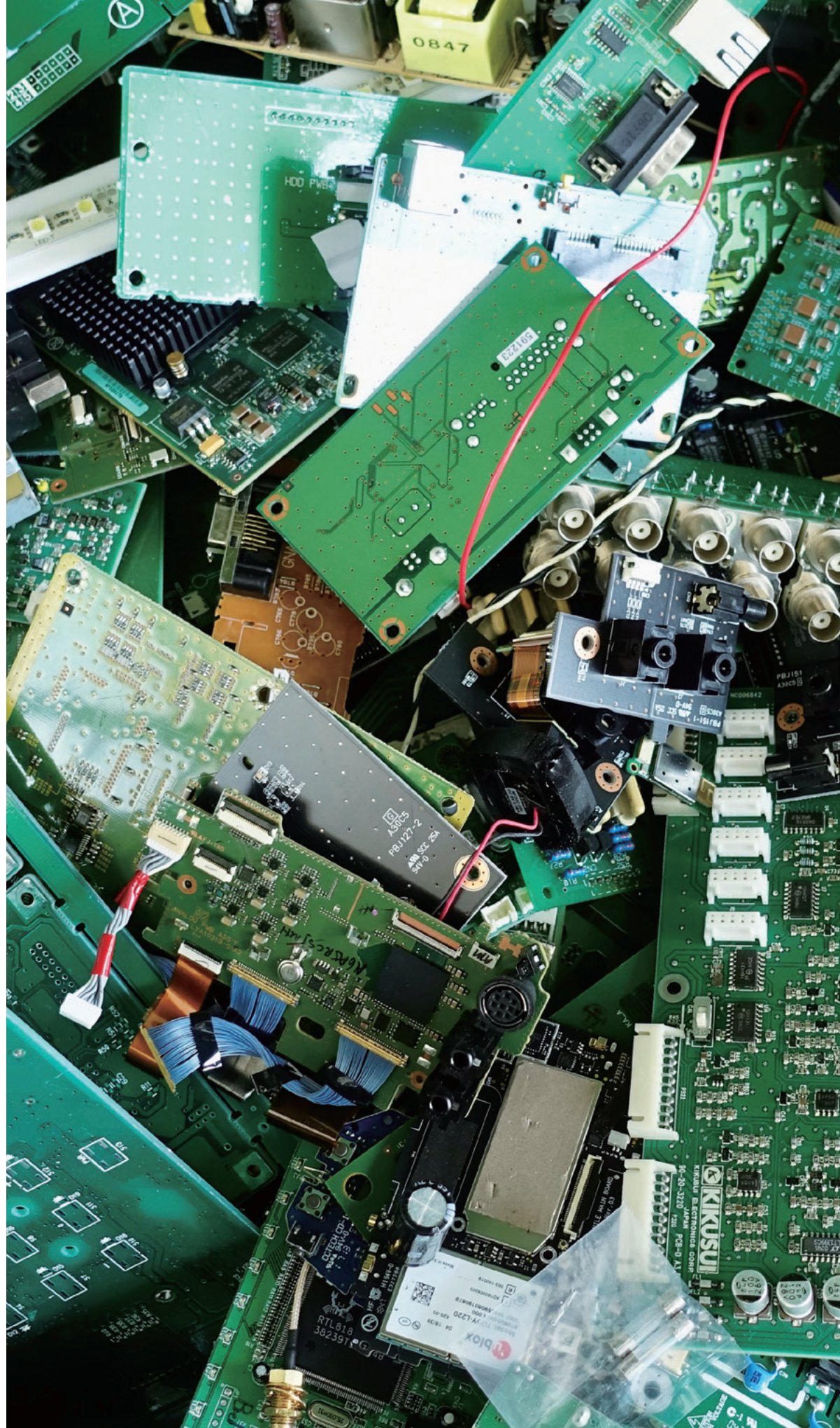
使用済みの製品を回収し再生・再利用する「静脈型事業」、製品を生み出す「動脈型事業」。ビジネスにおけるモノの流れを血液循環に例えてこう呼んでいます。

三菱マテリアルにおける静脈型事業は、使用済みの廃棄された製品をリサイクルプロセスに投入し、原料や素材として再利用していく工程です。これまでの家電リサイクルで培ってきた技術と、当社が強みを持つ「製錬」というプロセスを通じて有価金属を取り出す技術・経験を統合し金属資源の循環を構築し、その対象範囲と展開する地域規模を同時に拡大します。一方、動脈型事業とは、静脈型事業を通じて取り出した金・銀・銅をはじめとするさまざまな金属素材に新たな価値を付加して、世の中に供給することです。中経2030においては、特に半導体、xEV、航空宇宙などの成長市場に対し、求められる高機能な素材や製品を供給することで動脈型事業を強化し成長させます。

さらにそれらを進めるにあたっては、地熱・水力・太陽光発電といった再生可能エネルギーを最大限に活用することでカーボンニュートラルの実現を目指します。

「循環を
デザインする」
ということは、

地球からの贈り物を、
無駄なく生かすということ。



金属資源が足りない。 もっと「循環」の力が必要だ。

銅精鉱の確保量 50万トン以上が目標

熱や電気を効率よく通す素材「銅」は、スマートフォンから電気自動車まであらゆる機器に使われる、なくてはならない基礎素材です。銅への需要は今後も増加が続くと見込まれますが、一方で2025年以降は需要を満たすだけの銅が供給できなくなり、2030年には550万トンの供給不足になると言われています。

2030年度に「非鉄金属の資源循環におけるリーダー」を目指す三菱材料は、銅を製錬する際の原料となる銅精鉱の安定確保に取り組めます。近年では、2021年にチリのMantoverde銅鉱山の権益を取得したように、継続的な鉱山投資により、権益保有鉱山からの銅精鉱確保量50万トン以上を目

指します。さらに、銅鉱石を産出する「銅鉱床」に含まれる、さまざまな希少な金属を確実に回収していくための技術開発や、温室効果ガス削減など環境に配慮した製錬の仕組み構築を進めます。

世界トップクラスの 電気銅供給能力を活かす

また、地球から採掘している以上、金属資源は有限です。そこで私たちが着目しているのが、電子機器類の基板にすでに使われている金・銀・銅などの金属です。役目を終えた電子機器から「E-Scrap」と呼ばれる廃基板を取り出し、再び素材として使えるようにする。近年、電子機器類のリサイクル率が向上したことにより、E-Scrapの発生量は10年以内に

2倍以上に増えると言われています。また、銅需要の増加などを受けて、世界的にE-Scrapの「囲い込み」が常態化すると見込まれます。

三菱材料は、E-Scrapの処理量で世界トップクラスを誇ります。年間16万トンの処理能力を有し、今後のE-Scrap市場の拡大を見込み、更なる処理能力の増強を目指しています。また、E-Scrap取引に必要な情報を24時間いつでもオンライン上で確認できるプラットフォーム「MEX」の運用を2021年から開始し、E-Scrapの取引をより便利にしています。

これらの取り組みに加え、さらに、海外展開も加速させ、世界トップクラスの電気銅供給能力をもとに、三菱材料は資源循環の「コアサプライヤー」としての地位を確立します。

FOCUS

循環の力で 新しい電池の 未来を拓く



LIBリサイクル プロセスを早期開発へ

xEVが社会に浸透することで、廃棄されるリチウムイオン電池（LIB）は2030年度には数十倍に増加します。そこで三菱材料は、エンビプロ・ホールディングスとVOLTAと共同で、事業化を前提としたLIBのリサイクル技術開発を目指しています。E-Scrapビジネスで構築したネットワークを活かして、事業の鍵となる「ブラックマス」（LIBを放電・乾燥・破碎・選別したリチウム、コバルト、ニッケルの濃縮滓）を各所から集荷。グローバルな競争力を強化します。

「循環を
デザインする」
ということは、

「新しい『移動』と
つながる『をつくる』というひと。」



自動車は変わる。通信は変わる。 だからこそ、素材にできることがある。

ものづくり力で描く“移動”の未来

家電や住宅、自動車など、あらゆるものがインターネットで結ばれるIoT時代では、スマートフォンをはじめとする情報通信機器の高性能化が求められています。その進化を支えているものこそ、三菱マテリアルの機能性材料や電子部品です。

進化という点では、自動車も100年に一度の大変革期を迎えています。世界はもちろん、日本においても2050年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにするカーボンニュートラルが宣言されましたが、その鍵を握るのが、ハイブリッド車（HEV）やプラグインハイブリッド車（PHEV）、電気自動車（BEV）といった、次世代電動車です。そのシェアは急速に拡大していて、2030年には国内新車販売台数の

50%以上を占めるのではないかとされています。

そんな自動車業界において、三菱マテリアルだからできることがあります。各種温度センサーや、大電流を流すバスバーなどに用いる無酸素銅、自動運転化で小型化が求められるコネクタに用いる端子用銅合金など、三菱マテリアルのユニークな製品が、自動車の進化を加速させます。

海外においても、自動車などの産業向けソリューションを提供しているグループ会社のLuvata社のノウハウと当社の研究開発能力や銅加工の技術力を掛け合わせ、付加価値のある製品を生み出します。

三菱マテリアルは、変革期を事業機会と捉え、高付加価値な製品とそのものづくり力で“新しい移動”をつくっていきます。

マーケットの発展に 欠かせない存在を目指して

私たちの安全で快適な日常を支える生命線は、最先端の材料や技術です。当社は、長年の技術やノウハウの蓄積により、素材とコーティング技術の強みを活かした世界No.1品質の超硬工具を生産しています。それは、自動車や航空機、医療機器で使用する部品や材料の加工に不可欠な工具です。

さらに当社はMHT社※への出資を通じて、超硬工具に欠かせないタングステンのリサイクル事業も強化します。そうした取り組みにより、三菱マテリアルは高付加価値な製品をものづくりの現場に安定的に提供することで、マーケットにおいてなくてはならない存在となることを目指します。

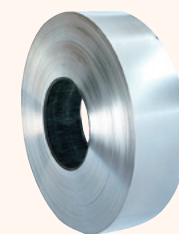
※MHT社 正式名は、Masan High-Tech Materials Corporation

FOCUS

ものづくりの 進化にえる 製品・素材

移動の未来にえる素材

xEVでの情報表示や自動運転の急速な進化において、活躍するのが高強度銅合金「MSP5」。耐力力緩和特性と端子成型性に優れているため、xEV向けコネクタの端子材料として最適です。



MSP5

熱を制する素材

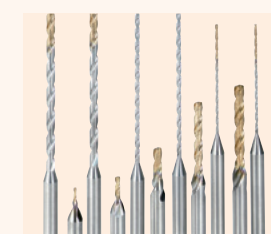
xEVの熱マネジメントを司るのが、高速応答性、高精度を誇る三菱マテリアルのサーミスタ。「素子からの一貫製造」による、形状・特性の自由度の高さでお客様に合わせた製品を提供します。



サーミスタ

ものづくりを変える高性能製品

お客様に高能率で高寿命、高精度な新世代ドリルを提供するために誕生した「DVASドリル」は、「待ちなし、折れなし、曲がりなし」な小径ドリルとして、ものづくりの現場で細穴加工の常識を覆します。



DVASドリル

「循環を
デザインする」
ということは、

持続可能なエネルギーを、
自ら「つくる」ということ。



再エネ電力自給率を、100%に。 そしてカーボンニュートラルへ歩む。

地熱発電の さらなる新規開発に注力

人類は石炭、石油、天然ガスなどの化石燃料に依存してきましたが、これらはあと数十年で枯渇すると予測されています。社会を持続させるには、再生可能エネルギーが鍵を握ります。その課題は、発電量が天候に左右されてしまうこと。三菱マテリアルが40年以上携わってきた地熱開発・発電事業は、地下のマグマの熱を利用するため、天候に左右されず安定供給できる発電として注目されています。

蓄積した地熱の知見を活かし、さらなる事業拡大を目指すために、三菱マテリアルは、3年に1カ所のペースで地熱発電の新規開発

を進めます。現在も、各地で地熱プロジェクトが展開されています。2021年からは秋田県荻ノ森地域で地熱資源量調査を行い、2022年からは北海道恵山地域の地熱開発に参画。安比地熱発電所では2024年の運転開始に向け、順調に工事を進めています。

再エネ電力の「自給自足」を 目指し、事業領域を拡大

三菱マテリアルは、これまでも鉱山や製錬所などで必要な電気を「自給自足」でまかなうため、再エネ電力開発を進めてきました。この動きを加速させていくため、2030年度の目標として「再エネ電力自給率100%に向

けた再エネ発電の拡大」を掲げます。将来的に、発電コスト低下が見込まれる風力発電への参入や、新規バイオガスプラントの拠点展開などによって、事業フィールドの拡大も図ります。

これらの取り組みによって、2050年度には自社消費電力に匹敵する再エネ発電量の実現、つまり再エネ電力による「自給自足」を目指します。

「人と社会と地球のために」私たちができることは何か。資源や素材の再生、再利用で社会に貢献してきた三菱マテリアルだからこそ、その知見や強みを活かしてカーボンニュートラルを実現させます。

FOCUS

再生可能 エネルギーの 利用拡大に 貢献



安比地熱発電所 2024年運転開始へ

三菱マテリアルは新たな地熱開発を積極的に進めており、2015年には三菱ガス化学とともに、岩手県八幡平市に安比地熱を設立しました。電源開発が加わり3社での事業化を進め、2024年4月の運転開始を目指して、安比地熱発電所(出力14,900kW)の建設工事を行っています。CO₂排出量抑制だけでなく、地域の電力安定供給を担います。

MMのある街を訪ねて



世界中を旅する女性、あるこさんが三菱マテリアルグループの拠点がある街を訪ねます。



ナビゲーター
あるこさん
まち歩きと工場見学が
趣味の女性：20代後半。

小名浜製錬株式会社編

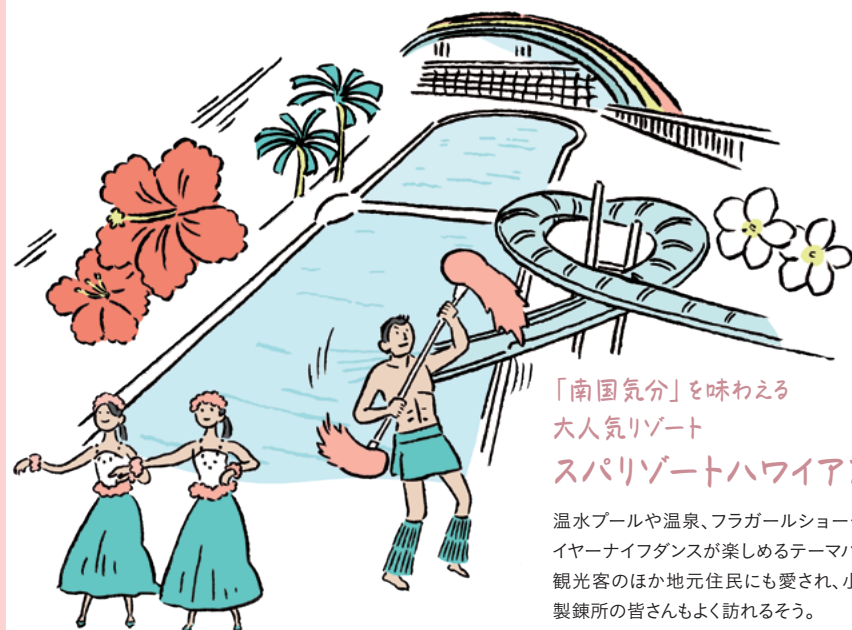
今回は、製錬・資源循環事業を支える

小名浜製錬株式会社 小名浜製錬所がある街をご紹介します。

福島県の東南端、いわき市の「港町」にある小名浜製錬所。

1963年に日本初の共同銅製錬所として創立され、今年で60周年を迎えます。

そして4月からは三菱マテリアルの完全子会社となり、グループの事業をより一層支えています。



「南国気分」を味わえる
大人気リゾート
スパリゾートハワイアンズ

温水プールや温泉、フラガールショーやファイヤーナイフダンスが楽しめるテーマパーク。観光客のほか地元住民にも愛され、小名浜製錬所の皆さんもよく訪れるそう。



いわきを彩る
夏の風物詩
いわきおどり

小名浜では夏に「いわきおどり小名浜大会」を開催。自慢の衣装をまとった住民たちが「どんわっせ」の掛け声と共に、街中で踊ります。過去には小名浜製錬所の従業員も参加し、地域を盛り上げました。

地域が誇る歴史的建造物 国宝白水阿弥陀堂

平安時代後期の代表的な阿弥陀堂建築。藤原清衡の娘・徳姫が、夫・岩城則道公の供養のために建立したとされています。美しい曲線を描く屋根と、浄土式庭園が調和した優美な姿を見て楽しめます。



案内してくれた人
事務部 総務課
わたなべ ゆりの
渡辺 有里乃さん

2021年入社。広報を担当し、小名浜製錬所の社内報に携わるほか、法務の仕事も担う。地元のお気に入りスポットは「いわき・ら・ら・ミュウ」の魚介類市場。小名浜自慢の海産物を市場で買い、料理を楽しんでいる。



とろける白身が美味 メヒカリ

常磐沖は全国有数のメヒカリの漁場で、いわき市は「市の魚」としてPRしています。地元の居酒屋・酒縁で食べる「酒縁でる めひかり茶漬け®」はやみつきになる人気料理です。



小名浜製錬所へようこそ!

小名浜製錬所について

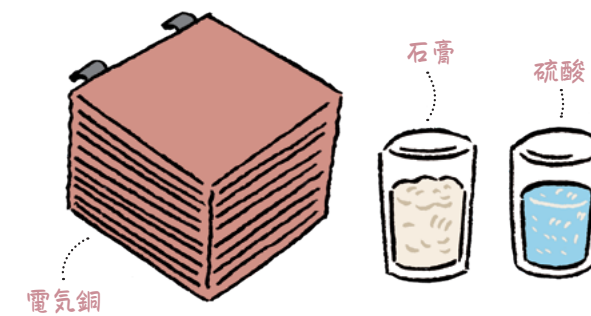
原料となる銅精鉱や有価金属含有スクラップなどから、純度の高い「電気銅」を製造しています。現在は銅の製錬技術を利用することで、シュレッダーダストなど産業廃棄物の処理、金属・熱のリサイクルも展開。実は銅のほかにも、製造工程で発生する亜硫酸ガスなどから石膏や硫酸といった副製品がつくられています。



有価金属リサイクル原料

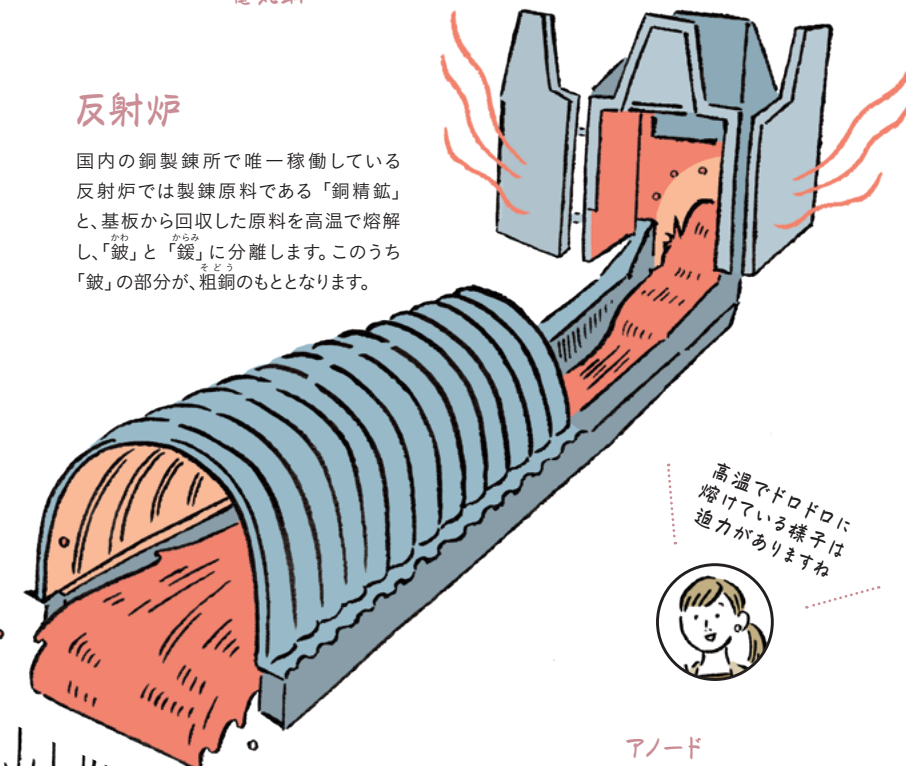
電子機器の基板には、銅などの有価金属が含まれています。小名浜製錬所には世界中から「E-Scrap」と呼ばれるこの有価金属含有スクラップが集められ、これらを粉砕した後、選別、製錬することで貴金属を回収し、銅は電気銅としてリサイクルしています。

小名浜製錬所で製造している素材



反射炉

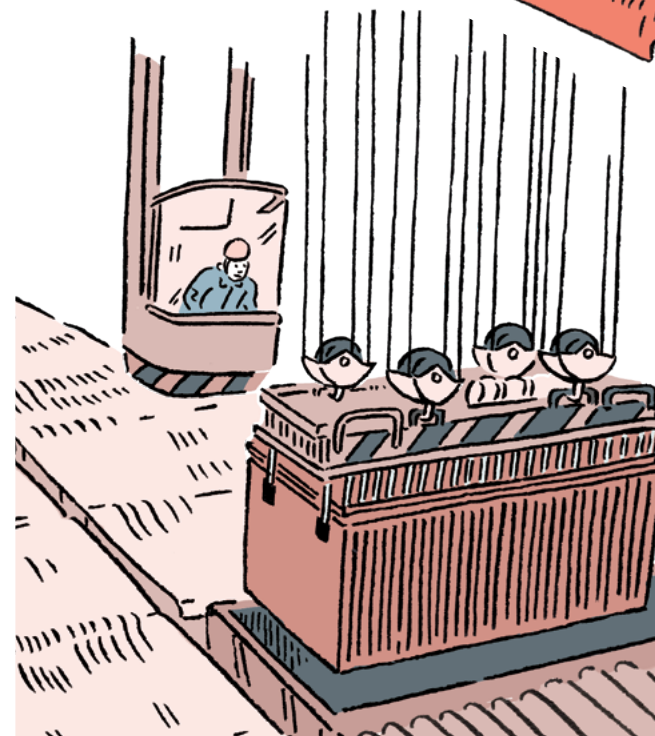
国内の銅製錬所で唯一稼働している反射炉では製錬原料である「銅精鉱」と、基板から回収した原料を高温で溶解し、「鉍」と「鍍」に分離します。このうち「鉍」の部分が、粗銅のもととなります。



高温でドロドロに
溶けている様子は
迫力がありますね

電解工場

粗銅でつくられた「アノード」を電解液に浸し、電解精製します。これにより純度99.99%以上の電気銅を製造しています。電気銅は、電線や電子機器材料などの原料になります。



アノード

案内してくれた人
事務部 総務課
きふね けんいち
木船 憲一さん

1990年いわき製作所入社、2012年から小名浜製錬所勤務。人事・労政・渉外・庶務などを担当。地元のおすすめは小名浜港で開催されるいわき花火大会。お気に入りグルメは「たべのみ屋 火縄銃」の串焼き。





「個の力が輝く職場は
みんなの納得感の先にある」

三田工場 製造部 製造第2ユニット
シリコン精密加工品グループ

ふじもと ひでゆき
藤本 英之

生産性向上の鍵は「個の力が最大限に発揮できる職場づくり」

スマートフォン、自動車、医療機器など、あらゆるものがインターネットにつながるIoT時代。実は、そうしたIoT機器を製造する中で、三菱マテリアルの製品が幅広く利用されています。また、それら製品の生みの親は、国内および世界31の国と地域の拠点で働く、三菱マテリアルの仲間たちです。

しかし昨年、人口減少による働き手不足や世界情勢の混乱による原材料価格の高騰など、私たちを取り巻く事業環境はめまぐるしく変化しています。そうした中で、三菱マテリアルは「人と社会と地球のために」という企業理念のもと、各製造拠点における「生産性の向上」に取り組んでいます。では、職場の生産性を高めるために私たちができることはなんなのでしょうか。私が三田工場で働いてきた15年の日々を思い返してみると、その鍵は「個の力が最大限に発揮できる職場づくり」にあると思います。

「なるほど!」という腹落ち感が次の行動の原動力

「その原因はなんだと思う?」。これは新人

時代によく先輩から問いかけられた言葉で、大切な教訓としてずっと心に残っています。私は普通科高校出身ということもあり、製造の仕事について右も左も分からない状態で入社しました。そのため何か問題が起きても、ただ先輩の指示を仰ぐだけでした。でも、この言葉をきっかけに、報告する前には自分で現状を確かめるようになりました。すると、仕事の流れが見えてきて、それまでよりも自発的に仕事に取り組めるようになったのです。

現在は7名の班員をまとめる班長の立場ですが、後輩から質問された時にはすぐに答えを教えるのではなく、先輩がしてくれたようにまずは問いかけ、それから一緒に答えを考えるようにしています。まずは自分で考えることが成長するための第一歩ですし、「なるほど!」という腹落ち感は次の行動の原動力になると思います。

重視したのは自分たちの手で仕事を効率化しているという実感

当社は、2022年4月から各製造拠点におけるものづくり力の別格化の一環として、「生産性の向上」と「サプライチェーンの強化」に取

り組んでいます。私は現在、半導体製造装置などに使われるシリコン部品を製造する工程のうち、原材料の加工工程を担当しており、自工程の生産性の向上に取り組んでいます。

そこでまず、班員の3名に日々の作業を実演してもらい、それを動画で撮影することで業務の見える化を行いました。その後、班員みんなで動画を観ながら、「この作業は2回目だから省けるね」「この清掃を怠ると機械の故障につながりかねないから注意してね」といった意見を出し合い、どこにボトルネックがあるのかを突き止めていきました。

その際に私が重視したのは、班員一人ひとりに「自分たちの手で日々の作業を効率化している」と実感してもらうこと。今までのやり方を変える中で、「昔からこのやり方でやってきたのに」といった声も少なからずありましたが、その一方で「迷いが解消されました」といった声もあり、私自身とてもやりがいを感じました。

私はこの活動の中で、今後も人と人とのつなぎ役を担っていきます。そして、この活動の根幹でもある、「個の力が最大限に発揮できる職場をみんなの手でつくる」という文化を、次世代につないでいきたいです。



(上) 班員みんなの意見を大切にしています。

(右) 班員の意見をしっかり吸い上げられるよう、日頃から腹を割ったコミュニケーションを心がけています。



社会をつくる 素材の力

半導体・IT 部品

自慢の『ものづくり力』で
高品質な製品を提供
「小物高精度部品加工」

スマートフォンや自動車、インターネットをはじめとする社会インフラに搭載されている半導体は、今や私たちの生活に欠かせない物質です。その半導体をつくる機械、半導体製造装置の部品の製造には、三菱マテリアルの小物高精度部品加工用工具が用いられます。

小物高精度部品加工とは、金属を切削工具と呼ばれる工具で加工して、小さく、精密な部品をつくること。この分野への参入は2002年、当時は認知度が低かった自動旋盤という工作機械に着目したことが始まりでした。そこから業界トップレベルのコーティング技術と素材加工技術を活かして徐々にラインアップを拡充。開発段階での作り込みや生産後の徹底した品質管理により、お客様のニーズに応えた高品質の製品を提供し、現在に至るまで自動車や医療分野を中心に幅広い業界で利用されています。今後は、高付加価値な切削工具の供給を通じ、より需要が高まる半導体分野においてさらなる成長を目指します。

PICK UP

難 削 材 旋 削 加 工 用
PVDコーテッド超硬材種
MSシリーズ「MS9025」

切削工具の耐摩耗性と耐欠損性はトレードオフの関係。どちらかを高めようとすると、片方の性能が落ちてしまう。そんな2つの性能を高水準で両立させたのが「MS9025」。長い製品寿命で、部品の製造コスト低減や高品質化に貢献する。

リサイクルのヒミツ

三菱マテリアルの素材や技術の「ヒミツ」に迫ります！

SOZAI FILE NO.5

「家電リサイクルのDX」

ってどんな技術？

冷蔵庫やテレビなどの家電は、家電リサイクル工場で解体・分別され、金属などの貴重な資源が回収されています。三菱マテリアルは、実はこの家電リサイクル事業で国内シェア1位！今回はこの事業を「DX」の力で支えている、当社独自の技術「操業管理システム」についてご紹介します。



ソザイに詳しい
Dr. マテリ

三菱マテリアルのラボで日々研究に動かし、素材フリークな博士。

家電に付いた「ID」で情報を読み取る

家電リサイクル券

家電を処分する時に家電に貼る「家電リサイクル券」には、13桁の「券番号」(ID)が付いています。

リサイクル
お願いま〜す!

No.10 冷蔵庫くん
出身地: □□県
入荷日時: □月□日

操業管理システム

家電リサイクル券番号 (ID) を読み取ると家電の“出身地”などの情報が分かります。券番号をもとに情報が紐づけられていき、解体後は家電の種類、メーカー名、部品情報、解体日時などが登録されます。

解体された家電の電子基板には、金・銅などの貴重な金属が含まれます。三菱マテリアルの強みは、この金属の再資源化。国内トップの規模で大量の金属をリサイクルし、循環型社会に貢献しています！

解
体

回収した資源の重さをもとに 環境への貢献度を自動計算！

操業管理システムは、解体した家電から回収された金属などの資源の重さを把握できます。この情報をもとに、資源を回収したことで「環境への負荷をどれくらい軽減できたか」を算出する、LCA (ライフサイクルアセスメント) の指標を自動計算。最先端のDX技術を活かした操業管理システムには、循環型社会に一層貢献できる力が詰まっています！

体の一部が貴重な金属

こんなところに活かされます



長く使える家電づくりのために

今後、リサイクル工場に搬入された家電の製造年式を読み取ることができれば、家電が捨てられるまでの「使用年数」を把握できます。この使用年数を私たちのパートナーである家電メーカーに共有することで、「より長く使える家電づくり」のための情報として役立てられることが期待されます。

工場に届いた家電のデータをクラウド化することで、各地の工場間での情報共有も進められているのじゃよ。



TOPICS

2023年1〜3月における、三菱マテリアルの主要トピックスをお伝えします。

「健康経営優良法人2023」に2年連続認定、「スポーツエールカンパニー2023」に初認定

このたび、従業員の健康増進に関する多彩な取り組みが評価され、特に優良な健康経営を実践している法人として、「健康経営優良法人(大規模法人部門)」に、2年連続で認定されました。2020年10月の「三菱マテリアルグループ健康経営宣言」の制定以来、各拠点において様々な活動が行われ、健康・衛生水準のレベルアップが図られています。今回の認定はこうした活動が評価をうけたもので、順位も昨年(1151〜1200位)に比べ、701〜750位へと大幅なアップを果たしました。また健康アプリを用いた全社的なウォーキングイベントなどの施策が評価され、スポーツ庁より「スポーツエールカンパニー2023」に初めて認定されました。今後も積極的に健康経営活動のレベルアップを図ってまいります。



資源循環領域拡大・強化のための組織再編

三菱マテリアルは、2023年4月1日付で、資源循環事業および再生可能エネルギー事業強化のため、組織再編を行いました。

- 資源循環事業：廃棄製品から、銅製錬などのプロセスへ投入できる原料を取り出し、有価金属を抽出することを一貫した事業として効率的に行える体制へ。
- 再生可能エネルギー事業：全社として再生可能エネルギー事業を戦略的に推進していく体制へ。

この再編により、「人と社会と地球のために、循環をデザインし、持続可能な社会を実現する」という私たちの目指す姿を実現します。



ゴールドショップ三菱東京・丸の内店 リニューアルオープン

2023年2月27日、金地金・金貨直営小売店である「ゴールドショップ三菱東京・丸の内店」がリニューアルオープンしました。新型コロナウイルスの感染拡大やロシア・ウクライナ情勢といった有事の際の有望な投資先として、「三菱の金」に対する注目が高まり、多くの個人投資家からの関心も高くなっています。それらのご期待に応えられるよう、設備面では応接室を設けて床面積を1.4倍とし、高級感のある内装にリニューアルしました。今回のリニューアルを機に、これからの皆さまにさまざまなサービスを提供いたします。



『WITH MATERIALS』読者アンケートにご協力ください

今号の『WITH MATERIALS』に対する皆さまの率直なご意見・ご感想、取り上げてほしいトピックスをお寄せください。

<https://forms.office.com/r/W7gGxJCuXD>



小又川水力発電所竣工記念祝賀会開催

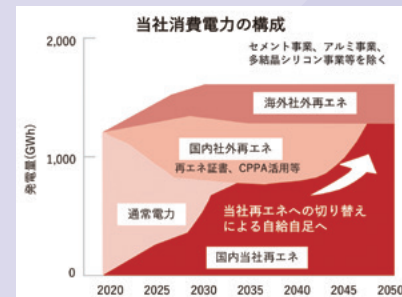
2022年12月から運転を開始した秋田県の新しい水力発電所、「小又川新発電所」の竣工記念祝賀会が2023年3月2日、北秋田市内で開催されました。会には地元の北秋田市長をはじめ、施工業者など約60名にご出席いただきました。「小又川新発電所」は当社としては69年ぶりの新たな水力発電所となります。運転開始後、順調な稼働を続けており、当社よりご出席の皆さまへ謝辞が述べられると共に、これからも地熱・水力をはじめとした再生可能エネルギー事業に取り組んでいくことが伝えられました。



温室効果ガス排出量の削減目標引き上げ および再生可能エネルギー利用率の目標値設定

三菱マテリアルはこのたび、温室効果ガス排出量^{*}の削減目標を見直し、2030年度までに47%削減(2020年度比)を目指します。この目標に向けて製造拠点の省エネ、設備改善などへ105億円を投資。さらに、2045年度のカーボンニュートラル実現のため、再生可能エネルギー事業へ300億円の投資を行い、当社が強みを持つ地熱発電などの開発、利用拡大を進めます。2035年度に自社使用電力の再生可能エネルギー利用率を100%、その内の66%を自社再生可能エネルギー由来電力とし、2050年度には実質的な再エネ電力自給率100%を目指します。

※事業者自らによる直接排出であるScope1および供給されたエネルギー利用に伴う間接排出であるScope2



タウンホールミーティングを開催

三菱マテリアルは2023年4月から始まる「中期経営戦略2030」浸透のため、国内外のグループ従業員を対象とした、オンラインタウンホールミーティングを開催しました。執行役社長の小野がプレゼンを行い、合計約2,000人の従業員がリアルタイムで参加しました。参加者からは多くの質問が寄せられ、これからの戦略への理解向上を図りました。今後も、事業分野ごとの説明会を開催するなど従業員への浸透をさらに深め、「中期経営戦略2030」で掲げた目標の実現に向けグループ一丸となって取り組んでまいります。



森と

マテリアル



はやきた ゆうふつぐんあびらちよう
マテリアルの森の木が使われている早来学園の校舎（北海道勇払郡安平町）

地域の未来のために

木材は、自然が生み出す宝物。三菱マテリアルが所有する「マテリアルの森」が生み出す木材は、建築用材やバイオマス燃料などに姿を変えて、資源循環や地域社会のために、大切に使われています。さらに今回は、2023年4月開校の早来学園の校舎として生まれ変わりました。

安平町の小中一貫校、早来学園。実はこの校舎に使用されている木材の50%以上が、学校の近くにあるマテリアルの森の木でつくられています。「木の温もり」を感じるこの空間は、みんなが集まりたい場所。この町の子どもたちは、マテリアルの森で植樹や散策も楽しんでおり、地域交流のために森の力が活かされています。

地域の木は、地域の未来のために使う。そんな思いで私たちは森を育て、環境保全や利用価値の最大化に取り組みながら、木材の供給を持続可能にできました。それは、森が持つ無限大の可能性を信じているからです。

